

『読解力診断テスト』の結果からみた学生の傾向

The Student's Tendency of KUIS from a Result of “The Test to Check the Reading Comprehension of Japanese”

上村 和美 *

Kazumi UEMURA

抄 録

2013年に大学生の読解力を調査するための『読解力診断テスト』を実施した。本稿では、その結果のうち、第Ⅰ問「読書習慣」、第Ⅱ問「記憶（再認課題）」および、言語知識を問う、第Ⅲ問「漢字（読み・書き取り）」、第Ⅳ問「慣用句」の結果について報告する。さらに、実施した被験者数全体と関西国際大学での実施結果とを比較しながら、現代の大学生の読解力の基礎知識に関する傾向をまとめた。

1. 「読解力診断テスト」とは

「読解力診断テスト」とは、「大学初年次でのクリティカル・リーディング力育成カリキュラムと教材開発に関する研究」（平成22～26年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（1））課題番号：22530840 研究代表者：上村和美）の研究成果の1つであり、実際に関西国際大学で2013年に実施したものである。

読解力を身につけるプログラムを考えるにあたり、読解力のある/なしが弁別できるテストの制作が必要だと考えた。総合的な読解力が不足しているのか、それとも特定の能力に対する理解力が付属しているのかを把握し、プログラムを構築する必要があるからだ。

しかし、たとえば1コマ90分をかけて行うテストを、実施する時間を確保することは現実的ではないだろう。なぜなら、予めシラバス等で15コマの授業内容を決定しておく必要がある現在の大学教育では、1コマ分の追加や変更は容易ではないからである。「読解力診断テスト」は、たとえばゼミのように文献資料を読む授業の中で、どの程度の読解力があるのかを測定することを想定して制作した。したがって、30分程度で実施可能なコンパクトな内容に収めることを目標とした。

まず、読解力を測定するには、読解力の構成要素について明確にする必要がある。何をもって読解力があると定義するのかという点から、明らかにしなければならないのである。本研究では、概念整理の検討を重ねた結果、暫定的に次のように定めた。

* 関西国際大学グローバル教育推進機構 教育総合研究所学内研究員

表1 読解力の構成要素

言語知識	局所的理解	全体的理解	表現力
漢字の読み・書き取り・語の意味・慣用句・コロケーション・オノマトペ・文法(助詞)	接続詞・指示語・原文復帰・計算式・文章の長さ・適語(慣用句・オノマトペ)	整序問題・タイトル・主旨・要約・表層構造(O×)・マトリックスにする	説明問題・グラフ or 表の読み取り

全体の問題の構成にあたっては、上記の構成要素を網羅する内容とした。これらの構成要素は、前述の科研による研究チームで実施したものであり、現在も検討を続けている。したがって、この分類が完成版ではない。

また、「読解力診断テスト」の形式のモデルイメージとしては、2001年に実施した「学習技術診断テスト」とした。問題冊子と解答冊子を作成し、テスト実施時には問題冊子と解答冊子の問題と解答が組み合わさるようにし、前のページには戻れない仕組みとした。

2度にわたるパイロット調査を実施し、被験者へのインタビュー調査を行ったのち、改訂作業を行った。具体的には、実施時間が30分程度におさまるように、問題数の削除や問題内容の差し替えを行った。

読解力診断テスト

問題冊子 平成25年度

本調査は平成23年度科学研究費補助金「大学研年次でのクリティカル・リーディング力育成カリキュラムと教材開発に関する研究」(課題番号:22509841)の採択を受けて実施するものです。ご回答いただいた内容は、すべて統計的に処理しますので、みなさんの回答が他の人に知られることはありません。安心して回答してください。

2013年10日
研究代表者: 関西国際大学 上野和英

【諸注意】

1. 解答にあたっては、監督者の指示にしたがってください。
2. 監督者の指示があるまで、問題冊子と解答冊子を開いてはいけません。
3. 問題は、全部で3題あります。
4. 解答はすべて解答用紙に記入してください。
5. 問題ごとに制限時間があります。制限時間は各ページの右上に記載されています。
6. 解答中は、監督者の指示があるまで、ページを開いてはいけません。
7. 時間が余っても前のページに戻って問題や答案を見直したり、解答することはできません。
8. 解答の際、印刷が不鮮明な箇所があったり、ページが抜けている場合は、すぐに手をあげて監督者に知らせてください。
9. 問題の内容に関する質問は、受け付けません。
10. テスト終了後、問題冊子・解答冊子ともに回収します。

諸注意を讀んだら、問題冊子と解答冊子の両面側に学籍番号と氏名を記入してください。記入後は、筆記用具を置いて監督者の指示を待ってください。

学籍番号		氏名

指示があるまで、次のページを開いてはいけません。

1

図1 「読解力診断テスト」 問題冊子 表紙

本研究で作成した「読解力診断テスト」は、表1の構成要素を網羅するものとし、表2のような内容となった。第I問は読書習慣についてのアンケートのため、構成要素には属しないと判断した。

それ以外の第Ⅱ～Ⅹ問については、「言語知識」「局所的理解」「全体的理解」「表現力」の構成要素のいずれか、あるいは複数に属する問題となっている。そのため、4要素が完全にバランスがとれているものではない。しかし、実施時間の点から考えると、さらに要約問題を増やすことは受験者の負担を増やすだけとなるため、現実的ではないだろう。

また、「読解力診断テスト」の採点結果がほぼ満点となるような場合には、プログラムの受講は不要となることが考えられる。つまり、プログラムを受講するか否かのスクリーニングの手段となりうるのである。

表2 「読解力診断テスト」の構成

		解答時間 (分)	配点		言語知識 漢字の読み・書き取り・語の意味・慣用句・コロケーション・オノマトペ・文法(助詞)	局所的理解 接続詞・指示語・原文復帰・計算式・文章の長さ・適語・(慣用句・オノマトペ)	全体的理解 整序問題・タイトル・主旨・要約・表層構造(○×)・マトリックスにする	表現力 説明問題・グラフ or 表の読み取り
第Ⅰ問	読書習慣	1						
第Ⅱ問	記憶	6	1*20	20			○	
第Ⅲ問	漢字	2	1*20	20	○			
第Ⅳ問	読解1	3	1*4	4	○	○		
第Ⅴ問	慣用句	2	1*20	20	○			
第Ⅵ問	読解2	4	2*6	12	○	○	○	
第Ⅶ問	表の読み取り	5	2*5	10				○
第Ⅷ問	計算	2	1*2	2		○		
第Ⅸ問	オノマトペ	3	1*4	4	○			
第Ⅹ問	要約	12	10	8			○	

本稿で分析対象とするのは、第Ⅰ問「読書習慣」、第Ⅱ問「記憶(再認課題)」および、言語知識を問う、第Ⅲ問「漢字(読み・書き取り)」、第Ⅳ問「慣用句」とする。なお、「読解力診断テスト」は現在も開発中のため、本稿では問Ⅰの読書傾向に関する設問以外は、問題そのものは開示しない。

2. 「読解力診断テスト」の結果

2013年に実施した「読解力診断テスト」の被験者総数は239名で、内訳は表3のようになる。

表3 「読解力診断テスト」実施人数の内訳

大学名	学年	人数	人数計
関西国際大学	4	11	56
	2	45	
O大学	3	4	18
	2	7	
	1	7	
K大学	3	2	165
	2	163	
合計			239

全体の集計結果は表4、関西国際大学のみの集計結果は表5である。以下、表4と表5を比較しながら、結果の考察を行っていく。

表4 Q1の集計結果(全体)

	【Q1】	【Q3】	【Q4】	【Q5】	【Q6】	【Q7】	【Q8】	【Q9】	【Q10】
	普段本読むか	本を読むことが楽しい・面白いと思うか	学校で使用するテキスト・教科書を読む頻度	新聞を読む頻度	小説を読む頻度	雑誌を読む頻度	マンガを読む頻度	書店や図書館をどのくらい使用するか	もっと本を読みたいと思うか
まったくない	55	12	38	108	65	16	40	37	5
あまりない	83	45	120	82	76	56	48	70	39
ときどき・ややある	89	118	71	34	81	116	90	106	108
よくある	12	64	10	14	15	49	59	25	86
まったくない	23%	5%	16%	45%	27%	7%	17%	16%	2%
あまりない	35%	19%	50%	34%	32%	24%	20%	29%	16%
ときどき・ややある	37%	49%	30%	14%	34%	49%	38%	45%	45%
よくある	5%	27%	4%	6%	6%	21%	25%	11%	36%

表5 Q1の集計結果(関西国際大学)

	【Q1】	【Q3】	【Q4】	【Q5】	【Q6】	【Q7】	【Q8】	【Q9】	【Q10】
	普段本読むか	本を読むことが楽しい・面白いと思うか	学校で使用するテキスト・教科書を読む頻度	新聞を読む頻度	小説を読む頻度	雑誌を読む頻度	マンガを読む頻度	書店や図書館をどのくらい使用するか	もっと本を読みたいと思うか
まったくない	9	4	8	16	17	2	10	8	1
あまりない	18	12	34	21	22	10	8	22	10
ときどき・ややある	28	34	13	14	17	28	26	24	31
よくある	1	6	1	5	0	16	11	2	14
まったくない	16%	7%	14%	29%	30%	4%	18%	14%	2%
あまりない	32%	21%	61%	38%	39%	18%	15%	39%	18%
ときどき・ややある	50%	61%	23%	25%	30%	50%	47%	43%	55%
よくある	2%	11%	2%	9%	0%	29%	20%	4%	25%

Q1「あなたは、ふだん本を読みますか」については、表4で[まったくない:23%、あまりない:35%]を合わせると58%となり、一般的にいわれている“活字離れ”の実態が証明されていると言える。一方、表5の関西国際大学(以下、本学)分のみの結果では48%となり、全体の傾向よりも低くなっている。しかし、Q3「本を読むことが楽しい・おもしろいと思いますか」については、表4では[ときどき・ややある:49%、よくある:27%]で76%だが、表5では[ときどき・ややある:61%、よくある:11%]で72%となり、全体の傾向よりも低くなる。つまり、本は読んでいるものの、楽

しきや面白さは見つけることはできない“受動的な読書”であると言える。主体的な読書というより、授業などにおける課題のための読書ということができらるだろう。これを裏付けるのが、Q6「小説を読む頻度はどれくらいですか」の回答である。[まったくない、あまりない]の合計は、表4では59%、表5では69%であり、本学の傾向は全体よりも10%高くなる。本学では、70%近くの学生が小説などのように課題と直結しない読書はしていないのである。

では、授業と直結する読書はできているのだろうか。Q4「学校で使用する教科書・テキスト(学習に関するもの)を読む頻度はどれくらいですか」に対する回答である。表4では[あまりない:50%、まったくない:16%]を合わせると66%、表5では[あまりない:61%、まったくない:14%]を合わせると75%となり、せつかくテキストを購入しても活用できていない実態が浮かび上がってくる。

さらに、Q5「新聞を読む頻度はどれくらいですか?」の回答は、表4では[あまりない:34%、まったくない:45%]を合わせると79%で、80%近くが新聞を読んでいないことがわかる。一方、表5では[あまりない:38%、まったくない:29%]を合わせると67%となり、全体の傾向に比較すると本学学生の新聞購読の頻度は高い。ただし、ここでは電子版を含めた回答を想定していなかったため、朝日新聞「聞蔵」などのデータベースや、スマートフォン等で電子版を閲覧しているケースも含まれているかもしれない。しかし、本学の学生は就職活動で新聞購読を始めるのではなく、ある程度の新聞購読の習慣はあると考えることができるだろう。

Q7「ふだん、書店や図書館をどのくらい利用しますか」の回答は、表4では[あまりない:29%、まったくない:16%]を合わせると45%、表5では[あまりない:39%、まったくない:14%]を合わせると53%となり、本学学生の方が利用率は低い結果となっている。

ここまでの結果では、“活字離れ”や“受動的な読書”の傾向が目立っていたが、Q10「これからもっと本を読みたいと思いますか」では、表4では[ときどき・ややある:45%、よくある:36%]を合わせると81%、表5では[ときどき・ややある:55%、よくある:25%]を合わせると80%となり、いずれの場合も読書に対して嫌悪感を抱いているのではないということはわかった。学生たちは日々の学修の中では課題などに追われているだろうし、目的養成型の学部であるならばなおさらその傾向は強いだろう。しかし、大学生活は、自分自身のために時間を費やすことができる最後の機会である。そして、社会人になれば大学生活よりも自分の時間は少なくなる。隙間時間を見つけて、“主体的な読書”の習慣を身につけることが望まれる。

2. 2 再認課題

第Ⅱ問は、再認課題 (Recognition Task) と呼ばれる形式の問題である。問題文を読んだ時に、命題が構築できているかどうかを確認するための問題である。具体的には、最初に1,000字程度の問題文を3分間で読んで、そのあとに内容に関する質問文が20あり、質問文の内容が○か×かを3分間で解答するというものである。問題文を読む際には、①制限時間内であれば何度読みなおしてもよいこと、②メモをとってはいけないこと、③質問文があること、④質問文について答える際には問題文を読み返せないことが注意事項として記されている。なお、質問文は、文章中の命題

のみを表しており、問題文中に明示されておらず推論が必要となるもの、読み手の知識、経験を問うものは一切含んでいない。

全体の結果は表6、関西国際大学の結果は表7である。

Ⅱ(1)	Ⅱ(2)	Ⅱ(3)	Ⅱ(4)	Ⅱ(5)	Ⅱ(6)	Ⅱ(7)	Ⅱ(8)	Ⅱ(9)	Ⅱ(10)	Ⅱ(11)	Ⅱ(12)	Ⅱ(13)	Ⅱ(14)	Ⅱ(15)	Ⅱ(16)	Ⅱ(17)	Ⅱ(18)	Ⅱ(19)	Ⅱ(20)	平均
○	○	×	×	○	○	×	○	×	×	○	×	○	○	×	×	×	○	○	×	平均
218	177	166	214	221	228	129	220	208	135	202	193	215	208	176	153	132	143	190	90	180.9
91%	74%	69%	90%	92%	95%	54%	92%	87%	56%	85%	81%	90%	87%	74%	64%	55%	60%	79%	38%	76%

Ⅱ(1)	Ⅱ(2)	Ⅱ(3)	Ⅱ(4)	Ⅱ(5)	Ⅱ(6)	Ⅱ(7)	Ⅱ(8)	Ⅱ(9)	Ⅱ(10)	Ⅱ(11)	Ⅱ(12)	Ⅱ(13)	Ⅱ(14)	Ⅱ(15)	Ⅱ(16)	Ⅱ(17)	Ⅱ(18)	Ⅱ(19)	Ⅱ(20)	平均
○	○	×	×	○	○	×	○	×	×	○	×	○	○	×	×	×	○	○	×	平均
49	36	38	49	52	51	30	47	45	33	45	35	50	45	39	24	23	29	39	17	38.8
21%	15%	16%	21%	22%	89%	53%	82%	79%	58%	79%	61%	88%	79%	68%	42%	40%	51%	68%	30%	53%

表6では平均正答率は73%となり、それを下回ったのが20問中8問となった。表7では平均正答率が53%であり、それを下回ったのが20問中11問となった。平均正答率は、全体と本学で20ポイント以上の差がある。短時間で読んだ内容について、メモをとらずに記憶するという方法に慣れていないことと、活字に慣れていないことが、この差が生じた理由と考えられるだろう。

2. 3 言語知識

(1) 漢字の読みと書き取り

第Ⅲ問は、漢字の読み10題と、書き取り10題の合計20問である。いずれも、常用漢字の範囲内の基本的な語彙である。全体の結果は表8、関西国際大学の結果は表9である。

表8 第Ⅲ問結果(全体)

平均	よみ平均	書き平均
61%	76%	47%

表9 第Ⅲ問結果(関西国際大学)

平均	よみ平均	書き平均
57%	71%	43%

本学のスコアの平均よりも全体の平均のほうが4ポイント高くなっている。しかし、いずれの結果においても、書き取りよりも漢字の読みのほうが圧倒的に高いポイントとなっている。レポートは手書きよりもワープロ使用率が高くなり、メールやSNSでも漢字を変換する機会が圧倒的に多いため、漢字を書く機会が減っていることと関係していると考えられる。

(2) 慣用句

第Ⅴ問は、空欄に適切な漢字一字を入れて慣用句を完成させる問題である。複数の正解が出ないように、前後に文脈を与えている。全体の結果は表10、関西国際大学の結果は表11である。

V(1)	V(2)	V(3)	V(4)	V(5)	V(6)	V(7)	V(8)	V(9)	V(10)	V(11)	V(12)	V(13)	V(14)	V(15)	V(16)	V(17)	V(18)	V(19)	V(20)	平均
88	170	162	219	193	164	175	15	111	185	180	27	160	77	121	77	59	97	172	110	128.1
37%	71%	68%	92%	81%	69%	73%	6%	46%	77%	75%	11%	67%	32%	51%	32%	25%	41%	72%	46%	54%

V(1)	V(2)	V(3)	V(4)	V(5)	V(6)	V(7)	V(8)	V(9)	V(10)	V(11)	V(12)	V(13)	V(14)	V(15)	V(16)	V(17)	V(18)	V(19)	V(20)	平均
19	45	38	48	42	41	38	2	26	41	42	5	29	19	30	10	5	18	36	26	28
33%	79%	67%	84%	74%	72%	67%	4%	46%	72%	74%	9%	51%	33%	53%	18%	9%	32%	63%	46%	49%

慣用句に関しては、全体、本学、いずれのスコアも低い結果となっている。やはり、現代の大学生が日常生活において慣用句を用いる場面が少ないことに原因があるだろう。特に、その場所に定着するという意味の「根を下ろす」（正答率は20問中で最も低い6%）という慣用句を使う場面はほとんどないのかもしれない。また、慣用句の知識がないということは、読書習慣がないことにも因るだろう。

4. まとめと「読解力診断テスト」の今後の方向性

「読解力診断テスト」の実施結果について、実施大学全体と本学とに分けて考察することで、本学学生の学修における弱みを再認識することができた。本学では入学前教育として、スクーリング型の「ウォーミングアップ学習」を行っており、その中のプログラムには「ゼミナール入門」がある。このプログラムは、ゼミナールという授業形式を体験させることと、新書を読むという二つの目的を持っている。入学後にも「基礎演習」で引き続き、新書を読むように継続性を持たせているが、読書習慣が育つような工夫がさらに必要なのかもしれない。

今後は、テスト内容をさらにコンパクトにして、ゼミ単位等で手軽に行えるものに改良していきたいと考えている。現行の「読解力診断テスト」では、実施時間の合計が40分になっている。当初、予定していた実施時間の目標に近づけることを優先したあまりに、解答時間を適正な時間より少なく設定してしまったケースもあった。そのため、今後の実施に向けては、さらに内容を精査していく必要がある。

参考文献

- 1) 上村和美：「第6章『読解力診断テスト』とは」 「大学初年次でのクリティカル・リーディング力育成カリキュラムと教材開発に関する研究」研究成果報告書（平成22～26年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（1））課題番号：22530840 研究代表者：上村和美） pp.47-51 2014
- 2) 上村和美・藤木清：『日本語運用能力の測定』 「学士力を支える学習支援の方法論」第8章 pp.268-272 2012
- 3) 上村和美，藤木清：「大学入学時における読解力と「日本語運用能力テスト」との関係に関する一考察（2）」『関西国際大学紀要』，第13号 pp.51-56 2012
- 4) 上村和美，藤木清：「大学入学時における読解力と「日本語運用能力テスト」との関係に関する一

【謝辞】：本研究は平成22～26年度JSPS科研費（基盤研究（C）（1））「大学初年次でのクリティカル・リーディング力育成カリキュラムと教材開発に関する研究」（課題番号：22530840）および平成27年度JSPS科研費（基盤研究（C）（1））「LTD および反転授業に着目したクリティカル・リーディング力育成プログラム」（課題番号：15K04269）の助成を受けたものです。

Abstract

A research team was tested as “The test to check the reading comprehension of Japanese” in 2013. In this thesis, I reported on the working memory and the reading custom and the kanji(write in kana and dictation) and the idiomatically which are as a result of“ the test to check the reading comprehension of Japanese”